

『手足の違和感 首の病気かも?』 文：脳神経外科 大井 政芳

今回は頸椎疾患の症状及び顕微鏡下での外科手術について説明します。



【病態及び症状】

頸椎は7個の骨から構成されており、骨と骨との間にクッションとしての椎間板とそれらを取り巻く靱帯によって頭を支え(支持性)、かつ滑らかに動くという相反する機能を無意識のうちにおこなっています。

一方で脊椎は神経を入れる骨の管(脊柱管)を構成し、頸椎は首から下の全ての機能をつかさどる脊髄とその枝で上肢機能を司る神経根を保護しています。

そのため、靱帯、椎間板、関節に何らかの問題があり、支持性を失ったり、脊柱管の中の神経を圧迫されるようになると次のような症状があらわれます。

【上肢の筋力低下の場合】

- 首肩から手足にかけての痛みやしびれ
- 持っているものを落としやすくなった
- ボタンを掛けるのが難しい など

【下肢の筋力低下の場合】

- 膝が抜ける
- 階段が昇りにくい
- スリッパが履きにくい抜けやすい など

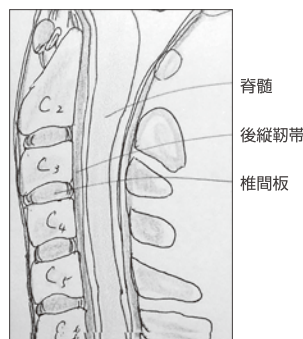
痛みの特徴は首の動きによって肩や手足に放散する電気が走るような痛みが一般的ですが、そうでない場合も多くあります。

また、症状が進行しますと、歩けなくなったりおしっこが出にくくなったりする事もあります。

頸椎疾患の一般的な病気には、頸椎椎間板ヘルニア、変形性頸椎症、頸椎後縦靱帯骨化症があり、稀なものとして、脊髄の腫瘍や感染症などがあります。

以下それぞれの病態と手術治療について説明します。

脊椎の脊柱管及び脊髄



●頸椎椎間板ヘルニア

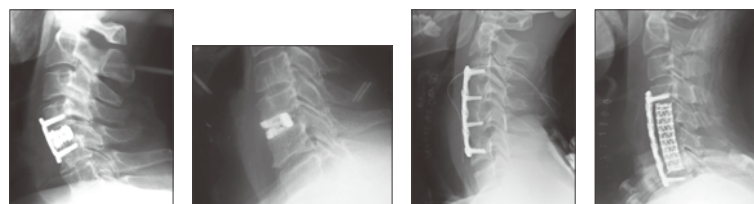
椎間板の変性や外力によって椎間板が脊柱管内へ突出し、神経を圧迫して症状を引き起こします。急激な発症形態をとるものが多い病態です。

絶えがたい痛みが主な症状であることが多いのですが、四肢麻痺で発症することもあります。

手術は首の前から頸椎の前面に到達して椎間板を摘出、その後にケージ(金属のスペイサー)を挿入し固定するのが一般的です(頸椎前方固定術)。



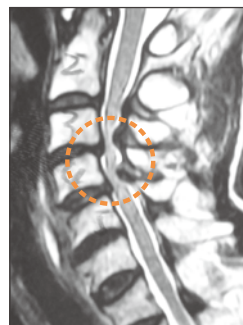
頸椎前方固定術



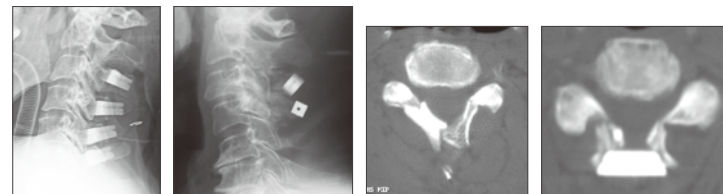
●変形性頸椎症

脊椎の老化に伴った病態で椎間板が潰れ、椎体の上下に骨がでたり、椎体がすれたり、靱帯が肥厚したりして神経を慢性的に圧迫する病態であり、経過が長く症状は緩解と増悪を繰り返しながらゆっくりと進行するのが特徴的です。

手術は頸椎前方固定術又は首の後ろから脊柱管を構成する骨を開いて間接的に神経の圧迫を取り除く方法(頸椎椎弓形成術)が一般的な手術方法です。



頸椎椎弓形成術



●頸椎後縦靱帯骨化症(OPLL)

脊柱管の前の部分にある靱帯が骨になって神経を圧迫する病気です。

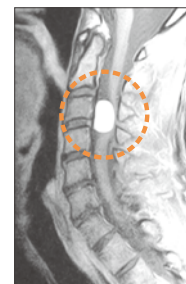
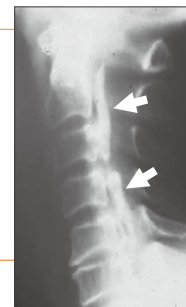
手術は頸椎前方固定術か、頸椎椎弓形成術が一般的であります。

●脊椎・脊髄腫瘍

脊髄腫瘍は脊柱管の中の神経系の構成組織である神経、及び硬膜から発生する腫瘍であり、脊椎腫瘍は椎体から発生する腫瘍であります。

いずれも摘出し神経の減圧及び良性、悪性の病理診断にて術後の治療方針を決定するのが一般的です。

上記の症状がありましたら、脊椎外来へお気軽に受診ください。



年末年始 休診のお知らせ

12月29日(火)～1月3日(日)

休診とさせていただきます。

1月4日(月)より、通常通り診療を行います。

クリスマスコンサートのお知らせ

●日 時：12月19日(土) 14:00～14:45

●場 所：聖隷沼津病院A棟1階 外科外来前

●参加費：無料 ●申込み：不要

沼津ハーモニカクラブさんによる演奏を行います。ぜひご参加ください。

●お問い合わせ

法人本部事務局 事業企画室 ☎(055)952-1000

診療放射線技師おしえてコラム ～そっくりな装置だよね編～



CTとMRIは何が違うの?

	CT	MRI
撮影手段	X線	磁気
放射線被曝	あり	なし
着替え	検査部位のみ	全身
検査時間	比較的短い(20分以内)	比較的長い(20分以上)
画像断面	横に輪切りの断面	任意の断面

主な比較を上表にまとめました。
このほかにもCT検査は一度に全身の検査が出来るという長所があります。MRI検査は造影剤を使わずに血管画像が得られるという長所があります。

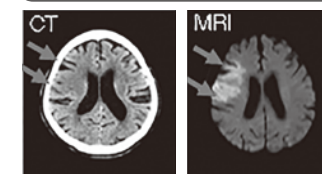


CTとMRIはどのように検査を使い分けているの?



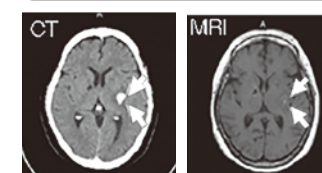
CTもMRIも疾患によって得意不得意があります。例として脳の検査画像で比較してみましょう。

【脳梗塞】



脳梗塞はCT画像では異常がわかりませんが、MRI画像では梗塞部位が白くははっきりとわかります。

【脳出血】



脳出血はCT画像では白くははっきりと写りますが、MRI画像ではわずかな変化しか現れません。

このように患者さんの疾患や状態に合わせて検査を選択しています。

(文：放射線課 原田 真)

